

16 『金匱要略』水気病篇の「痲癩」

について

○渡辺 賢治・花輪 壽彦

ハンセン病(癩)の起源に関しては『旧約聖書』の中にも癩と考えられる記載があり、有史以来存在していたと考えられている。古くは大風、悪疾、癩風、大麻風、天刑病と呼称されていたが、『黄帝内経素問』風論篇には「癩とは榮氣熱腑有りて、其氣清からず。故に鼻柱をして壞れて色敗れ、皮膚をして瘍潰せしむ。風寒脈に客して去らず。名づけて癩風とい、或いは名づけて寒熱という。」とあり癩が癩を含む疾患を指すものと考えられる。『論語』雍也第六に冉伯牛が病氣になり、孔子が見舞う段がある。この時の冉伯牛の病に関して、『淮南子』では「伯牛厲となる」といい、『白虎通』には「冉伯牛言を危(ただ)しくし、行を正しくす。而も悪疾に逢う」とある。これらの文章からは冉伯牛の病氣はハンセン病であったと

考えられ、この時代から中国でもハンセン病が存在したのと考えられる。

しかし、『金匱要略』には癩もしくは癩という字が用いられている箇所は水気病篇のみである。黄汗の病と風水との鑑別を述べた条文に「風氣相搏(う)ち、風強ければ則ち隱疹(いんしん)と為り、身体痒を為す。痒は泄風(せつふう)と為り、久しくして痲癩と為る。」と記載されている。この「痲癩」について大塚敬節は『金匱要略講話』で、かさぶたもしくはきざずあとと解説しており、また森田幸門は『金匱要略入門』で痲皮、鱗屑、膿疱を指す、と注文に記載している。しかし、『医宗金鑑』では「痲癩は疥癬、癩癘の類これ也。」とあり、多紀元簡の『金匱要略輯義』、浅田宗伯の『雑病論識』でも同様の解釈を加えている。しかし、『傷寒論』平脈法にも「風氣相搏ち、風強ければ則ち隱疹となり、身体痒を為す。痒は泄風となり、久しくして痲癩となる」との記載があり、林億は注して「眉少髮希、身に乾瘡ありて腥臭す」といい、これはハンセン病の症状を指しているものと考えられる。

痲癩の前の条文の「隱疹となり、身体痒を為す。痒は

「泄風となり」に対しては『金匱要略輯義』では「風のため管が偏り隠疹と為り、身体が痒くなる。痒のものは肌が虚していて、風邪が外を薄くする為である。名づけて泄風邪という。今でいう風燥瘡に相当する」とある。また、森田幸門の『金匱要略入門』には「泄風」の説明として、「皮膚搔痒で、烈しく搔爬するために所々に点状あるいは線状の出血、あるいは瘡痕を作り血痂を結ぶのを泄風という」と説明している。しかし、片倉鶴陵の『癘新書』では大風、大麻風、大風瘡、大皮風、害大風など、ハンセン病の古い名称を羅列しており、その中に「泄風」を挙げている。

また『金匱要略』水気病篇の他の条文に「寸口の脈、沈滑なるは、中に水気あり、面目腫大、熱あるを名づけて風水という。人の目裏（もくか）の上を視るに微しく擁（よう）し、蚕の新たに臥起する状の如し」とあり、目の上の腫脹を表現しているが、これもハンセン病に特徴的所見ともとれる。

その他「四肢頭面腫」や「周痺」という表現など『金匱要略』水気病篇にはハンセン病を暗示する表現が含ま

れている可能性があると考えられる。

(北里研究所東洋医学総合研究所)